

現代文化天道虫学

保科英人

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 福井大学教育学部

Cultural Coleopterology (Coccinellidae) in Modern Japan

本誌前号に「近現代文化兜虫学」を上程したことで、ホタル、クワガタムシ、カブトムシの近現代文化甲虫学3部作を書き終えた(保科, 2017a, 2019a, 2019b)。ここで、近代新聞上で取り上げられたテントウムシの事例を紹介しよう。昭和11年、大阪朝日新聞と東京朝日新聞で、約70回の森永ミルクキャラメルの宣伝漫画が連載された(保科, 2014)。そして、同年11月28日付東京朝日新聞に掲載された連載漫画の第59回目。この日は日独防共協定が結ばれた3日後にあたり、ホタルとテントウムシが協定ごっこをして遊ぶとの回の漫画だ。ホタルの方は8頭が集合し、ナチスの鉤十字を描くように並んだ。一方のテントウムシは、マッチ棒で旗の輪郭を作り、自分が中央に位置することで日の丸を再現した。なぜ、ドイツ側がホタルなのかについては不明だが、日本側がテントウムシだった理由は明白だ。日の丸を丸いテントウムシで再現する必要があったからである。ただ、白黒漫画に描かれたテントウムシは前胸背板と上翅ともに黒点斑紋があるので、ナナホシテントウと言うよりは、ニジュウヤホシテントウのようにも見える。何れともあれ、この漫画からは、テントウムシ=赤色との作者の認識が強かったことが読み取れる。

さて、テントウムシに焦点を当てた本稿を、近現代文化甲虫学シリーズの第4作目としなかった理由は単純だ。近代期の文献を多々漁ってみたものの、現時点では上記の昆虫漫画以外に、何かを論じるだけのテントウムシ関連の資料が集まらなかったからである。よって、本稿では現代文化だけに対象を絞る。日用品に満ち溢れるテントウムシが、なぜ物語性のあるサブカルチャー内では登場頻度が圧倒的に少なくなるかを主な論点として考察していきたいと思う。

(I) 世間に大量に出回るテントウムシグッズ類

我々の身の回りの文房具や日用品には、テントウムシをモチーフとしたグッズが少なからずある。固有名詞を挙げるのは差し控えていただくが、

本学会には名うてのテントウムシグッズコレクターがおられる。いかなるグッズが世に存在するかについては、桜谷(2009)を参照していただきたい。

日用品や玩具のモチーフとなる昆虫は何もテントウムシだけではない。カブトムシ、クワガタ、トンボ、蝶などもグッズとなりうるわけだが(保科, 2018, 2019a, 2019b)、出回っている商品の数で言えばテントウムシに遠く及ばない。具体的な数値を出せるわけではないが、テントウムシグッズの種類の優位性は、他の昆虫たちと比較すると、ダブルスコアぐらいではすまないはずだ。

ただ、グッズ類の形態の多様性との点で見れば、話はまた違ってくる。宮ノ下(2015; 2019a)は数多くのテントウムシグッズの外見を分析し、その基本形をモデル化した。その結果、テントウムシグッズの基本形は、前方から触角、頭部、正中線で区切られた上翅、及び上翅の斑紋を持つことがわかった。そして、頭部と前胸背板が一緒くたになってしまうグッズも少なくない。図1は2013年に近所の全国チェーンの某ベーカリーが季節限定で売り出したテントウムシ型の菓子パンである。宮ノ下(2015; 2019a)が示したテントウムシグッズの基本形とはほぼ図1のようなテントウムシをイメージして貰えればよいだろう。

結論から言えば、テントウムシグッズの形態的



図1. 全国チェーンの某ベーカリーの季節限定菓子パン(日本)。



図2. 昭和40年代(推定)のブリキの玩具(日本).



図3. 雑誌『蟲』創刊号の表紙, 昭和4年.



図4. テントウムシ型マグネット(韓国・忠南国立大学昆虫学教室).



図5. プラスチック製玩具. 何らかのキャラクターのコピー商品の可能性もあるか?(平成30年9月中国広東省広州市の百貨店で購入).



図6. 金属製のテントウムシ型小物(アメリカからの輸入品. ただし, 生産国がアメリカとは断定できず).



図7. テントウムシ型のボタン(チェコ).



図8. 卓上ゲーム. 斑紋の数をトランプの数字のように見立てて遊ぶゲームか?(チェコ).



図9. 平成29年9月台湾台北市内にて撮影した自動車.



図10. 平成30年12月韓国ソウル市内で購入したスティック糊.

多様性は他種の昆虫グッズと比較すると, あまり高くない. 図2~10は日本, 韓国, 中国, 欧米諸国のテントウムシグッズ類, 及びイラストである. どれもこれも似たような形をしていることがわかる. テントウムシに対する外見のイメージは, 洋の東西を問わずほぼ同じだ.

テントウムシグッズは形もさることながら, 色

彩も同じパターンに集約される傾向がある. 図3は昭和4年創刊の雑誌『蟲』の表紙である. 我が国に限って言えば, テントウムシデザインはここ90年間ほとんど変化していないことがわかる. また, 本来, テントウムシ科の甲虫は種ごとに多種多様な色彩を有するが, グッズになるのは圧倒的にナナホシテントウムシ型の色彩である(例えば図8及

び 10) (注 1). 身近に生息するナナホシテントウの認知度の大きさが読み取れると同時に、赤い羽と丸い黒斑紋が人々に親しみを与えている証拠と言えるだろう。その反面、ナナホシテントウと同じく普通種であるはずのナミテントウはグッズ化されることがほとんどなく、その存在は全く無きがごとくである。

当然のことながら、フィクション作品中で描かれるテントウムシグッズも現実世界のナナホシテントウに近い形状を持つ傾向がある。例えば、2015 年放送の TV アニメ『ゆるゆり さん☆ハイ!』第 5 話で、脇役の大宮花子が所持していた宿題ドリルの表紙のテントウムシの絵柄は、図 3 の戦前のテントウムシの絵柄そのものである。

グッズとして見た場合、多くの商品で形や色が横断的に揃ってしまうのは、悪く言えば面白みを欠くのだろうが、逆の見方をすれば、テントウムシ型デザインの高い安定性を見出すことができる。特に安価な昆虫型日用品を想定した場合、折れやすい触角や足の再現は厄介な代物である。しかし、テントウムシの場合は、これら細い付属肢を省いても問題ない。円形の体、赤い上翅、左右上翅の会合部、上翅の黒斑紋さえ描いておけば、誰しもがそれをテントウムシであると認識できるからである。外部形態を極限まで簡略化しても、それが何の生物であるかが消費者に伝わるテントウムシは、確かに日用品グッズの世界では最強の昆虫である。

(2) 実際の生態とイメージの間の大きなズレ

幼稚園児が背負うリュックサックにテントウムシが描かれているのを町で時々見かける。とにかくテントウムシは世間からカワイイとの印象を持たれているらしい。そして、その理由はかなり明快に説明できる。実際の生物をグッズ化する時に必要な作業がデフォルメである。巨匠手塚治虫によれば、デフォルメの基本要素は省略、誇張、変形の 3 つである (高松・嶋津, 2011)。テントウムシの場合は、このうちの省略が徹底的に施されても、人々はそれをテントウムシと認識できることは既に (1) で述べた。さらに、マンガ等で行われるデフォルメで最も普遍的に読者にもたらされるのが幼形刺激である。幼形刺激とは、可愛いといった感情反応を誘う刺激を指す。この刺激を生み出す形態的特徴とは、短い手足、大きい頭、丸っこい輪郭、大きな眼などが挙げられる (雨宮, 2002)。テントウムシが丸い体型と短い手足を持つことは言うまでもない。単純にまとめるなら、テントウ

ムシはそもそも人がカワイイと思う形態的特徴を最初から有しており、そこにデフォルメを施すことによって、さらにその感情を強調できる昆虫なのである。

一般人が思い浮かべるテントウムシと言えばナナホシテントウであるが、同種が持つ鮮やかな赤色も、人々の意識に影響を与えている可能性もある。赤色は愛情、怒り、興奮、パワーなど、多種多様な心理的影響をもたらすとされるが (山脇, 2006)、人々は赤いテントウムシに愛情を見出しているとの解釈も可能だ。

可愛らしさが平和のシンボルに繋がるせいか、テントウムシは左派系団体の自衛隊海外派兵反対の新聞広告に描かれることがあった (保科, 2016)。しかし、テントウムシのこのようなイメージは実際の生態に全くそぐわない。なぜなら、多くのテントウムシは共食いも辞さない、貪食な捕食者だからである (佐々治, 1998)。テントウムシは甲虫界最凶の殺し屋で、平和とは真逆の昆虫と言ってもいいだろう。しかし、こういう行動生態的な科学的事実の人々にとってあまり重要ではない。なぜなら、デフォルメとは視覚的な操作であり (中村, 2002)、野外のテントウムシが持つ行動パターンと、人々のテントウムシへの印象とは直接関係がないからである。

グッズ化&キャラクター化した昆虫が、自然界に生息する昆虫の実態とかけ離れることは珍しくない (Hoshina & Takada, 2012; 保科, 2018; Hoshina, 2018)。しかし、テントウムシほど、人々のイメージと実際の生態に大きな乖離が生じている昆虫は、他に例がないと言ってよいだろう。

(3) 戦うテントウムシは少数派

特撮世界のテントウムシと言えば、筆者の世代なら『仮面ライダーストロンガー』のパートナーであり、テントウムシをモチーフとしたタックルがまず頭に浮かぶ。しかし、40 年に及ぶ『仮面ライダー』シリーズの歴史の中で、テントウムシは意外と縁遠い。テントウムシ型の仮面ライダーがいないこともさることながら、テントウムシモチーフの敵怪人もたった 1 回にすぎないのである (宮ノ下, 2014, 2019b)。日本特撮として仮面ライダーと双璧をなす『ウルトラマン』シリーズにもテントウムシ型怪獣はいないし、円谷プロ製作のウルトラマン以外の特撮諸作品のキャラクターでもテントウムシらしき怪獣・怪人は見あたらない (円谷プロダクション, 2005, 2013)。

では、ゲームやアニメの世界はどうであるか。

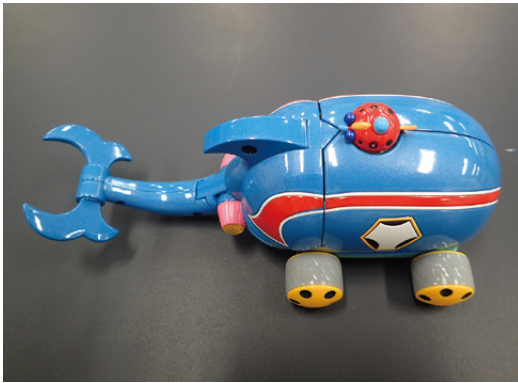


図 11. タイムボカンの『メカブトン』。© タツノコプロ。
背中の赤いパーツがテントウキ。

例えば、2020 年放送開始の TV アニメ『痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思います。』第 2 話にはテントウムシ型のモンスターが大量に出てくるものの、一瞬でヒロインのメイプルにやられてしまう。ようするに徹頭徹尾雑魚扱いである。一方で、日本が誇る RPG (ロールプレイングゲーム) の『ドラゴンクエスト』シリーズの I から IX には、テントウムシ型モンスターはそもそも登場しない(保科ら、2010)。

特撮の『ウルトラマン』シリーズにテントウムシモチーフの怪獣が登場しない理由は定かではない。『ウルトラマンタロウ』にはカンガルー型怪獣のパンドラが、そして『ウルトラマンレオ』にはツル型怪獣のローランが出て来る以上、「テントウムシは可愛いから怪獣にはできません」との説明はあまり説得力がない。真の理由は神と円谷プロのクリエイター陣のみぞ知るところである。一方、『ドラゴンクエスト』シリーズにテントウムシ型モンスターがいないことについては、筆者無責任な外野ながら、もっともらしい理由を付けられる。ドラゴンクエストの戦闘場面は敵モンスターと正面で向き合う構図である。必然的に敵モンスターはプレイヤーに腹側を見せることになるが、テントウムシの場合、背中の模様を見せないと、プレイヤーは敵がテントウムシであると理解しにくい。だから、『ドラゴンクエスト』シリーズにはテントウムシ型モンスターはいない、と言うのが筆者の解釈である。

戦うテントウムシ型キャラクターの事例は、『仮面ライダーストロンガー』『痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思います。』以外に何かないのか。例えば、70 年代の TV アニメ『タイムボカン』では、カブトムシ型主力機のメカブトンがテントウキと呼ばれる小型飛行機を搭載している(図

11)。ただ、テントウキは所詮偵察機のようなものであって戦場で活躍するわけではない。次に、伝説のプロレス漫画『キン肉マン』には一風変わったテントウムシ型超人がいる。コミック第 63 巻登場のマリキータマンと言うキャラクターで、厳密にはテントウムシではなく、テントウムシダマシ型超人である。正義超人のカレクックに対して「テントウムシの中には背面に毛があり、益虫ではないテントウムシがいる。それが(俺である)テントウムシダマシだ」と言い放つ場面がある。『キン肉マン』を読んでいる、「テントウムシダマシ」との名称が出てきたのは心底驚いた。

何はともあれ、自然界ではアブラムシを激しく攻撃するテントウムシではあるが、どうやら特撮やゲーム、アニメの世界では、アタッカーとしての役割は中々与えられないものらしい。

(4) 園芸少女とテントウムシ

植食性テントウムシは時として害虫と化す。オオニジュウヤホシテントウとニジュウヤホシテントウはジャガイモの害虫の一種として数えられる(例えば、梶原ら、1986)。多少なりとも甲虫学の知識があれば、農業害虫としてのテントウムシの位置づけは誰でも承知しているわけだが、世間サマはそうではない。全てのテントウムシ＝アブラムシを食べてくれる農業上の益虫との意識が根強い。

そのような人々の知見を反映してか、アニメやゲーム世界のテントウムシは、本来の主な生息場所である草原ではなく、畑や花壇に出没することが多い。しかも、二次元世界のテントウムシは、鍬を振りかざして力強く土を耕すオッサンではなく、なぜかミニスコップ片手に花や野菜をお世話する少女たちの元に飛んでくることが多い。ゲーム『ラムネ』(2004 年)と『私が好きなら「好き」って言って!』(2015 年)はその一例。『スイートハニーカミング』(2009 年)(図 12)では、博愛主義者



図 12. 『スイートハニーカミング』。
© HOOKSOFT / 角川書店。

でガーデニング好き少女のクレアが天道虫（テントウムシ）をまじまじと眺める場面がある。

テントウムシと少女が結び付けられやすいのは、愛らしいイメージが強く影響していると見てよいだろう。ただ、この類の場面でテントウムシの姿が描かれることはなく、文章のみの表示である。この理由については最後の（8）で改めて考察したい。

（5）間を繋ぐテントウムシ

場面場面がしっかりと区切られたコミックやゲームと異なり、アニメではストーリーの進行が一時的に止まる「間」が生じる。筆者がここで言う「間」とは、あるキャラクターが別のキャラクターが走って来るのをただ待つシーンや、学校の正門のアップ描写など、数秒～10秒単位のことを指す。お世辞にも重要なシーンとは言えないわけだが、アニメのこの中途半端な間を繋ぐ場面の背景で、何気なくテントウムシが描かれることがある。事例としては『ないしょのつぼみ』（2008年）第1話の花に止まるテントウムシ、『ハナヤマタ』（2014年）第7話の雨の中、アジサイから飛び立つテントウムシ、『ハクメイとミコチ』（2018年）第1話冒頭の葉に止まったテントウムシ、『恋する小惑星』（2020年）のオープニングアニメで望遠鏡から飛び立つテントウムシなどがある。なお、これらのテントウムシは全てナナホシテントウであって、同じ普通種であるはずのナミテントウはまず作品中で描かれない。この点は（1）で述べた、日用品グッズのテントウムシはナナホシテントウばかり、との状況に一致している。

上記アニメ作品のテントウムシには穏やかな雰囲気を表すとの意味合いがあるはずだ。とは言え、ミンミンゼミの鳴き声による夏の高揚感とか、暗闇を集団で飛ぶ蝶による不気味さの増幅などの強い演出効果があるとも思えない。ちょっとした間を繋ぐために、身近なテントウムシがさりげなく描かれているだけ、と解釈すべきだろう。ざっくりばらんに言うなら、テントウムシが画面に出てこようが出てくるまいが、作品にはほとんど影響を与えていないのである。

なお、米国アニメ『アドベンチャー・タイム』（2010年～）のエンディングでも、イモムシとミツバチとともにテントウムシが登場して長閑な場面を演出している。深い意味を持たせず、のんびりとした雰囲気を出すテントウムシの使用法は、我が国の専売特許ではないことは確認しておく必要がある。

（6）少女と戯れるテントウムシ

二次元世界ではカブトムシ、クワガタムシ、ホタルと戯れる少女がしばしば登場するのは言及したことがある（Hoshina, 2018; 保科, 2019a, 2019b）。テントウムシについても1ゲーム作品に心当たりがある。『FORTUNE ARTERIAL』



図13. 『FORTUNE ARTERIAL』。
© 2008 AUGUST.

（2008年）（図13）の吸血鬼で勝気なヒロインの千堂瑛里華が、主人公の支倉孝平とじゃれあう場面がある。孝平は瑛里華の肩についていたテントウムシを主人公が取ってやり、その後孝平の指にはわせたテントウムシを二人で見つめる。その後、瑛里華が別の男性から告白されたことを巡って、二人はややぎくしゃくするが、瑛里華が「テントウムシの可愛さにめんじて許してあげる」と言うことで、その場は丸く収まる。ヒロインがテントウムシをカワイイと直接口に出す描写はアニメやゲーム、コミックで時々見かけるものの、だいたい一瞬で終わる場面である。諍いの始まりから終わりまでテントウムシが絡む『FORTUNE ARTERIAL』のこの場面はやや特異なものである。

前出のTVアニメ『ゆるゆりさん☆ハイ!』第8話では、登場人物の古谷楓が池田千鶴の髪に着いていたテントウムシを払ってやり、その結果二人の会話が弾みだすとの場面があった。千鶴はやや気難しいとのキャラクター設定なので、このテントウムシも『FORTUNE ARTERIAL』と同様に、二人の関係を和ませる役割を果たしたわけである。また、2005年放送の『こいこい7』（図14）第9話では、幼いアスカアヨイが飛び立つテントウムシを見て「すごい」と喜ぶシーンがあった。この場合は、少女の無邪気さがテントウムシによって表現されているわけである。

（7）ギャグシーンのテントウムシ

アニメやゲームのギャグシーンに親和性が高いのは意外にもヒグラシだ、と言うのが筆者の持論である（保科, 2019c）。しかし、筆者が知りうる作



図 14. 『こいこい7』。© 2005 もりしげ・秋田書店／こいこい7製作委員会

品の中で、テントウムシがギャグシーンに使われた、唯一の事例がある。2019年のTVアニメ『女子高生の無駄づかい』の第4話。日頃から悪態ばかりついている主人公の田中望がある日コンビニに行った。すると、店員のオヤジの胸ポケットにテントウムシが止まっていた。田中がお金を払おうとすると、テントウムシはびっくりして飛び去り、オヤジの額中央に止まった。その結果、オヤジの顔は大仏のように見えたので、田中は「奇跡だ!」と驚いた……。文章だけで記すと何がギャグシーンなのかさっぱりだろうが、動画・音声付きで見ると中々面白い。

このテントウムシの用法は例外中の例外と言える。この場面では、オヤジの額に止まるのは小さくて丸い昆虫であることが必須なので、描かれるのは必然的にテントウムシしかあり得なかったわけである。

(8) 考察. アニメ・ゲーム界での存在感の薄さ。物語性を欠くテントウムシ。

日本から見て、地球の裏側に位置するヨーロッパ。欧州の主要言語の一つの英語では、テントウムシを ladybird ないしは ladybug と表現する。そして、他の欧州各言語ではテントウムシのことを「神の小さな盗賊」「神の子羊」「太陽の子牛」などと呼ぶ (Preston-Mafham, 2004)。そして、ヨーロッパ絵画史との観点で見れば、テントウムシは7個の悲しみを表象すると言ったような、日本人には想像し難い感覚が欧州にはある (Yanoviak, 2013)。とは言え、欧州民族がテントウムシに対し概ね好意的であることは着目すべき点である。

次に、太平洋を挟んで日本と向き合うアメリカ。同国ではホップの蔓を焼く際にテントウムシを巻き添えにしたくないとの思いから、「テントウムシ、テントウムシ、家へ飛んで帰れ。お前の家が燃えてるぞ、お前の子供が焼けちゃうぞ」との対句があ

ると言う (クラウセン, 1993)。

アメリカ人が概してテントウムシに対して好意的であることを示す、別のデータがある。Shipley & Bixler (2017) は昆虫学を学んでいないアメリカの大学生約 200 人を対象としたアンケート調査を行った。最初に個々の大学生に知っている昆虫の名前を最大 30 種書かせる。次に、自分が名を書いた昆虫から、最も好きな昆虫と嫌いな昆虫をそれぞれ 2 種ずつあげてもらった。その結果、まず知っている昆虫としてテントウムシをあげた大学生は 49.5 % で、約半数に達した。さらに、テントウムシを最も好きな昆虫であると回答した大学生は 28 % に達し、1 位のチョウ (43%) について 2 位につけた。さらに、別の集団から調査対象者を集め、個々の昆虫についてイメージを語ってもらったところ、テントウムシに対しては「可愛い」「幸運」「(人間に) 無害」などの印象を持つ傾向があることがわかった。幸運は別にしても、米国のテントウムシ観に大きな差は感じられない。

以上、日米欧 3 地域は発想の差はあれど、テントウムシを愛すべき昆虫として扱っていることは確かなようだ。我が国ではテントウムシは益虫としての不動の地位を保持している。応用昆虫学的にアブラムシを食べてくれるテントウムシは東洋・西洋の人々両方に重宝されている昆虫であること、改めて述べるまでもないだろう。また、テントウムシを lady と称する点も、現代日本文化で描かれるテントウムシを愛する少女との関連性をこじつけることも不可能ではない。

本稿 (2) で、テントウムシの実際の生態と人々の印象の間に大きな乖離が生じていると述べた。さらに、テントウムシが日用品昆虫グッズ業界で圧倒的シェアを占め、益虫としての知名度も抜群である一方で、マンガやアニメ、ゲームなどの世界では登場頻度が極めて少ない点も、顕著な乖離の一つである。(3) ~ (7) では二次元世界のテントウムシを取り上げたわけだが、事例としては決して多くないことがわかるだろう。さらに、それらの少ない事例は作品の物語展開とはほぼ無縁な、取るに足らないテントウムシばかりである。

では、人々に愛されているはずのテントウムシは、なぜ二次元世界では存在感が低くなるのか。一つには、日本人は季節性がない昆虫に対して郷愁の心情を抱かないから、と筆者は考える。俳句の世界ではテントウムシは夏の季語であるが (中尾, 2001; 今村, 2004)、実際は春から秋まで成虫が見られる。サクラは一瞬で散るから美しいと発想する日本人からすれば、年から年中ダラダラ

と草むらにいるナナホシテントウは可愛くはあっても、情緒的な魅力を感じなくても不思議ではない。古来、日本人は特定の季節にだけ出現する生き物に哀れを見出すのである(保科, 2018)。そして、日本人にとって季節性=情緒であるから、フィクション作品中で夏到来を告げるセミ、カップルがうっとり見つめるホテル、夜の神社でシリアスな雰囲気醸し出すスズムシの役回りは、どう逆立ちしてもテントウムシには務まらない。

二つ目は、テントウムシは体サイズが小さいが故に、テキストで名前が表示されても、その姿形が描かれる頻度は極端に少ないし、ましてや子供の虫捕りの対象とはなりにくいこと。アニメやゲーム世界における昆虫描写の大きな柱は幼き頃の虫捕りの回想シーンだが(保科, 2019d)、このような場面で使われるのはセミ、トンボ、カブトムシであって、テントウムシは呼びではない。

以上まとめると、テントウムシはようするに物語性を欠くのである。特定の季節、特に懐旧の情を深くする夏を表現できるわけでもない。カブトムシやクワガタムシのように武の象徴になれるわけでもない。チョウのようにお色気場面で性的アピールをできるわけでもない。となれば、何らかのストーリーを紡がねばならないアニメやゲームの世界では、ただただ丸く可愛いだけのテントウムシはどうしても出番が無くなるのである。そう言えば、『古事記』『日本書記』収録の日本神話でもテントウムシの出番はない(保科, 2017b)。

テントウムシはストーリー作品の場には中々姿を見せない一方で、外見の愛らしさとシンプルさとの強みを十二分に発揮し、日用品グッズの世界では未来永劫その存在感を示し続けるに違いない。

(注1) 令和元年11月野球の国際大会プレミア12が開催された。その試合のTV中継の際、Sky株式会社がロボットのテントウムシが飛び立つCMを盛んに流していた。そして、そのテントウムシはグッズ類でよく見る赤色ではなく銀色だった。比較的珍しい事例である。

※本稿を執筆するにあたり、著者は科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)の基盤研究(C)(課題番号:18K00254)の助成を受けている。

引用文献

雨宮俊彦, 2002. マンガにおける人物のデフォルメ表現についての心理学的考察: マンガ研究, (2): 5-19.
クラウゼン, W. ルーシー著. 小西正泰・小西正捷訳, 1993. 昆虫のフォークロア. 博品社. 264 pp.

保科英人, 2014. 戦前の新聞に見る昆虫漫画. 日本海地域の自然と環境, (21): 107-117.
保科英人, 2016. 近年の世相に見る日本人のトンボ観. *Pterobosca*, (21B): 50-51.
保科英人, 2017a. 近現代文化蛭学. さやばねニューシリーズ, (26): 38-46.
保科英人, 2017b. 古事記・日本書紀に見る日本人の昆虫観の再評価. 伊丹市昆虫館研究報告, (5): 1-10.
保科英人, 2018. 明治百五拾年. アキバ系文化蝶類学. 環境考古学と富士山, (2): 46-73.
保科英人, 2019a. 近現代文化鍬形虫学. さやばねニューシリーズ, (35): 12-20.
保科英人, 2019b. 近現代文化兜虫学. さやばねニューシリーズ, (36): 1-10.
保科英人, 2019c. 現代文化蟬学. アニメ・ゲーム編. p. 273-291. 保科英人・宮ノ下明大. 大衆文化のなかの虫たち. 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.
保科英人, 2019d. 脇役に甘んじる昆虫たち. p. 37-54. 保科英人・宮ノ下明大. 大衆文化のなかの虫たち. 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.
保科英人・稲木大介・丹治真哉・廣田美沙, 2010. アキバ系の文化甲虫学へ序章〜. ねじればね, (128): 5-19.
Hoshina, H., 2018. Cultural coleopterology in modern Japan, II: the firefly in Akihabara Culture. *Ethnoentomology*, 2: 14-19.
Hoshina, H. & K. Takada, 2012. Cultural coleopterology in modern Japan: The Rhinoceros beetle in Akihabara culture. *American Entomologist*, 58 (4): 202-207.
今村和夫, 2004. 俳句歳時記「昆虫」. 南条町文化協議会. 221 pp.
梶原敏宏・梅谷献二・浅川 勝, 1986. 作物病虫害ハンドブック. 養賢堂. 1446 pp.
宮ノ下明大, 2014. 映画(特撮・アニメ・実写)に登場する昆虫. p. 242-271. 三橋 淳・小西正泰編. 文化昆虫学事始め. 創森社. 273 pp.
宮ノ下明大, 2015. 暮らしの中のテントウムシデザインとは何か? その図像と鞘翅斑紋パターンの特徴. 都市有害生物管理, 5 (2): 61-67.
宮ノ下明大, 2019a. 暮らしの中のテントウムシデザイン. p. 108-123. 保科英人・宮ノ下明大. 大衆文化のなかの虫たち. 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.
宮ノ下明大, 2019b. 特撮ヒーローのモチーフとなった昆虫たち. p. 170-184. 保科英人・宮ノ下明大. 大衆文化のなかの虫たち. 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.
中村唯史, 2002. マンガにおけるデフォルメの位相について. 山形大学紀要(人文科学), 15 (1): 161-178.
中尾舜一, 2001. 図解昆虫俳句歳時記. 蝸牛出版社. 165 pp.
Preston-Mafham, K., 2004. *World of Animals*. Vol. 25. *Insects and Other Invertebrates*. 128 pp. Grolier, London.
桜谷保之, 2009. テントウムシグッズ. p. 118-121. 日本環境動物昆虫学会編. テントウムシの調べ方. 文芸出版. 148 pp.
佐々治寛之, 1998. テントウムシの自然史. 東京大学出版会. 251 pp.
Shipley, J. N. & R. D. Bixler, 2017. Beautiful bugs, bothersome bugs, and fun bugs: examining human interactions with insects and other arthropods. *Anthrozoös*, 30: 357-372.
高松耕太・嶋津恵子, 2011. キャラクターの外見的特徴量の計測実験. 情報処理学会研究報告, (27): 1-4.
円谷プロダクション監修, 2005. 決定版全ウルトラ怪獣. 講談社. 121 pp.
円谷プロダクション監修, 2005. 円谷プロ全怪獣図鑑. 小学館. 415 pp.
山脇恵子, 2006. 図解雑学. よくわかる色彩心理. ナツメ社. 238 pp.
Yanoviak, E., 2013. More than Marginal: Insects in the Hours of Mary of Burgundy. *Antennae*, 26: 86-102.

(2019年10月26日受領, 2020年2月10日受理)